
鷹狩り 単独捜査

西川 司



幻冬舎文庫

鷹狩り

単独
捜査

第一章

「来るな！ それ以上近づいたら、この女を殺すぞ！」

男が叫んだ。人質を取っている。コンビニ店の制服を着た若い女。男は左腕を女の胸に回し、右手に持ったナイフの刃を首筋に当てている。

店内に足を踏み入れた鷹見健吾は、立ち止まった。北海道警察本部・刑事部捜査第一課三係の警部補。身長百八センチ弱、がっちりした体軀。肌は浅黒く、精悍な顔立ちをしている。男は鷹見より幾分年齢は上だろう。四十代前半か。薄汚れたカーキ色のジャンパーにジーズ。落ち窪んだ目は血走り、げっそりした頬に無精ひげが伸びている。

「落ち着けよ。少し、話をしようじゃないか」

鷹見は、鋭いまなざしを男に向けながら、よく通る声で静かに言った。

「うるせえ！ 警察と話すことなんか何もねえ！」

男は声を荒らげたが、鷹見は微動だにせず、鋭いまなざしでじっと見据えながら、状況を

分析していた。男との距離は、およそ三メートル。だが、レジカウンターが障害になっている。隙を突いて飛びかかるのは危険だ。説得を試みるしかない。

「助けて……」

人質の若い女が蚊の鳴くような声を出した。化粧つ気のない、あどけない顔を歪め、目に涙を溜めている。高校生か大学生のアルバイトだろう。

店内には三人しかいない。事件発生時、他に四人の客と五十代半ばの男性店長がいたのだが、男がレジにいた若い女の店員を人質に取って騒ぎ出したとたん、いつせいに悲鳴を上げて外に逃げ出したのだ。一一〇番通報したのは店長だった。

現場となったコンビニは、札幌市北十九条西三丁目の住宅街の一画にある。所轄の札幌北署から車で十分ほどしか離れていない。

午後五時十三分。札幌北署刑事課の私服警察官四名と制服警察官四名の計八名が現場に急行した。

臨場した北署の刑事たちは、店内に突入はせず、外から拡声器を使って人質に危害を加えないよう、訴えつづけた。

時間稼ぎである。署長から本部の捜査員が来るのを待てという指示が出されていたのだ。

署長は部下たちが下手に動いて、もし人質に危害が加えられでもしたら自分に責任が及ぶ

と考えたのである。

保身だ。しかし、そんな命令を出すのは、何も北署の署長に限ったことではない。そもそも凶悪事件は本部が対応することになっている。

所轄署は本部からやってくる指揮官の下で動く。それが基本的なスタンスなのだ。

「なんだって、こんなことをした？」

鷹見が再び口を開いた。

「おもしろくねえからだよ」

男は不貞腐れた顔をして吐き捨てるように言った。

「おもしろくない？ 何がだ？」

鷹見は眉を微かに動かして訊いた。

「全部だよ。世の中、全部おもしろくねえんだよ」

捨て鉢になっていっているように聞こえるが、さっきより幾分落ち着いてきているように思える。

「世の中がおもしろくないからって、こんなことをしてどうかなんのか？」

「うるせえ」

男の言葉は乱暴だが、声に力がなくなっている。

「おれは鷹見という。おまえの名前は？」

「知ってどうすんだよ——そうか。外にいる警察のやつらに聞こえてるんだな。おれの名前を聞き出して、素性を調べようってんだろ」

そのとおりだ。上着の襟にピンマイクが仕掛けてある。そこから外の捜査員たちに聞こえるようになっていなのだ。

「マエは、あるのか？」

鷹見は、構わずつづけた。

「マエ？」

男は、ぼかんとした顔をしている。

「前科だ」

「——そんなもん、ねえよ」

唐突な問いに、男は戸惑いながら答えた。おそらく本当だろう。

「だったら、今すぐこんなことはやめる。大人しく言うことを聞けば、場合によっては刑務所に行かなくても済むかもしれない」

「場合によっては？ どういうことだ」

男は興味を持ったようだ。

「おまえが、どうしてこんなことをすることになったのか、同情すべき事情があれば執行猶

予がつくということだ」

男は住居侵入と逮捕監禁及び銃刀法違反の罪に問われることになる。初犯であればおそらく三年ないし四年の懲役、執行猶予五年といったところだろう。

しかし、男にどんな刑が下されようがどうでもいいことだ。鷹見の興味は、いかにして男を逮捕するかだけである。そのためには、なんとか男に隙をつくらせなければならぬと考えている。

男は鷹見から目を逸らした。何か考えはじめているように見える。内心、己がしてしまつたことを後悔しているのかもしれない。

鷹見は間を取ってつづけた。

「答えろ。何だって、こんなことをした？」

男は鷹見に顔を向けた。目が泳いでいる。どうしようか迷っているのだ。

「働いていたガソリンスタンドが潰れた……」

男は力なく言った。

「そうか——」

夕張市の財政破綻から、もう何年経つだろう。未だ北海道経済は回復の兆しすら見えていない。広い北海道に住む人々にとって、車はなくてはならない移動手段だ。その車に必要な

ただでさえ不景気なのだ。外出を控える人たちは増える一方だ。その結果、潰れるガソリンスタンドが急増している。

「中学を出てから、ずっとそこで働いてたんだ」

男は悔しそうに顔を歪めた。ということは、そのガソリンスタンドで三十年近く働きつづけていたということになる。

「おまえの田舎はどこだ？」

「礼文島だ……」

日本の最北端、稚内の西方六十キロの日本海に浮かぶ小さな島だ。北海道の中でも、自然の厳しさは一、二を争う場所である。そんな島で生まれ育ったのだ。本来、まじめで我慢強い男に違いない。大都会の札幌で、様々な誘惑にも負けず、地道に生きてきた。だが、出口の見えない不況のあおりを受けて長年働いてきた職場を失い、自暴自棄になってコンビニ強盗に及んだ——そういうことなのか？ だとしても、同情する気はない。男の、この愚かな行為は、決して許されることではないのだ。

「家族はいないのか？」

男が、ぴくっと反応した。

「いるんだろ？」

鷹見が、すかさず訊いた。

「出ていった。出ていっちまったんだよ——呼べ。美奈子をここに呼べ！」

男は突然、感情を爆発させた。

「美奈子っていうのは、おまえの女房か？」

鷹見は怪訝な顔になって訊いた。

「ああ。そうだ。あいつを——美奈子をここに呼んでこい！」

男の興奮は収まりそうもない。

「おまえ、家を出ていった奥さんと呼ぼうとして、こんなことをしたのか？」

鷹見は呆れ顔になって訊いた。男は答えを渋っている。凶星なのだろう。

「うるせえ。あんたなんかにおれの気持ちがあわかってたまるか！」

男は敵意のこもった目で睨みつけた。

が、鷹見は、ふっと薄い笑みを浮かべると、

「これじゃ、まるで下手なコントだな」

と言った。

「コント？ どういうことだ？」

男は、虚を衝かれたような表情をしている。

「女房に逃げられた刑事が、女房に逃げられたことに腹を立てて人質立てこもり事件を起こした男を説得するなんて、笑うに笑えない」

鷹見が言うと、

『班長、鷹見さん、どうかしてますよ』

イヤホンから、女の呆れた声が届いてきた。外で待機している水原理沙だ。二十九歳。独身。階級は鷹見と同じ警部補である。

『どう、どうかしているんだ？』

場違いな、のんびりした男の声がつづいた。水原と一緒に捜査車両の中で待機している捜査一課三係班長の善場茂警部である。

『だって、あんな見え透いた嘘について、どうしようっていうんですか』

水原の声は、呆れを通り越して苛立っている。

しかし、班長の善場は、

『こんな場で、そんな間抜けな嘘つくと思うかあ？』

と、投げやりな口調で言った。

『え？ じゃ、鷹見さん、本当に奥さんに……』

水原は途中で言葉を呑んだ。鷹見の耳にすべて聞こえていることを思い出したのだ。

『守るものがねえやつは、無茶なことばっかすつから厄介だよなあ』

善場班長の声には、小馬鹿にした調子と苦々しさが入り混じっている。鷹見に向けて言っているのだ。

鷹見が人質を取って籠城しているコンビニ店にひとりで入っていったのは、班長である善場の命令ではない。臨場するや否や、鷹見は善場班長の了解も取らずに勝手に行ったのだ。

「あんたも女房に逃げられたなんて、冗談だろ？」

人質を取っている男がまじめな顔をして訊いた。

「おれは、出世と冗談が苦手だな」

鷹見の顔から笑みは消えている。

「じゃ、本当なのか？」

「ずいぶん昔の話だ——」

鷹見の脳裏に、六年前の夜のこと蘇った。

あれは、数メートル先も見えないほど雪が降りつづいた寒い夜のことだ。珍しく仕事が早く終わり、中島公園のマンションに着いたのは八時ごろだった。

玄関のチャイムを鳴らした。いつもなら、どんなに遅い時間でもすぐに中から妻の声がし

て、玄関のカギを開けて出迎えてくれるのだが、その夜は違った。

不審に思いながら自分でカギを開けた。部屋に入ると室内は真つ暗で、妻の姿はどこにもなかった。

「買い物か？——そう思いながらリビングの電気をつけた。

ふと、食卓テーブルに目がいった。端正な文字で書かれた置き手紙があった。

『長い間、お世話になりました。お元気で。さようなら。美鈴』——鷹見は何度もその文字を目で追った。あまりに唐突過ぎることだったために、意味がすぐには理解できなかったのだ。事態を理解した鷹見は、美鈴の携帯電話にかけた。だが、電源が入っていないというアナウンスが流れるだけで、留守番電話につながらなかった。

鷹見は、固定電話の横に置いてある連絡帳を手にとって、片っ端から電話をかけた。

美鈴の実家、幼馴染み、趣味仲間の友人や結婚前に勤めていた会社の同僚たち——だが、美鈴の行方に心当たりがある者は、誰一人としていなかった。

「奥さん、なんで、出ていったんだ？」

男は疑わしい目で見ている。

「さあな」

どういうことなんだ？——何度も美鈴の置き手紙を眺めて考えたが、とうとうわからない

まま、あと少しで七年になろうとしている。

美鈴と出会ったのは、鷹見が警察官になって二年経ったころだ。大学時代の共通の友人からの紹介だった。

なんとなく交際するようになり、気がつくと鷹見は三十歳、美鈴は二十八歳になろうとしていた。お互いに、特に別れる理由が見つかからないままに月日が経っていた。

『そろそろ結婚するか』——三十歳の誕生日を祝う食事の席で鷹見が、ぼそりと言った。

『そうね』——美鈴は予想していたのか驚く風でも、かといって特段喜んだ風でもなく、鷹見のプロポーズを受け入れた。

そんな経緯で結婚したからだろう。二人の関係は、交際していたころとなんら変わることはなかった。いや、鷹見は以前にも増して刑事の仕事に没頭するようになっていった。

しかし、そんな鷹見に美鈴は文句を言ったことはない。美鈴は美鈴で、もともと体が丈夫でなかったこともあって結婚して少しすると仕事を辞め、好きなパッチワークやヨガといった趣味に精を出すようになった。そうした趣味を通じてできた友人たちとランチやショッピング、ときには旅行を楽しんでいたのである。

だが、美鈴が失踪してしばらく経ったころ鷹見は、美鈴が気になる発言をしたことがあるのを思い出した。

『あなたは人を疑うことしかできないのよ。あなたの目は、妻のあたしさえも信用していないって言っているわ』

姿を消すひと月くらい前だった。趣味仲間と一泊旅行に行くという話の流れの中で、鷹見が反対したわけでもなんでもないので、美鈴が唐突に言ったのである。

「惚れた男と逃げちまったんじゃないか？」

男が真剣な顔つきになって言った。

「そうかもしれないな」

鷹見は興味なさそうに言った。

「あいつも、きつとそうだ。美奈子も男ができたに違いねえんだ」

鷹見から視線を外して、つぶやくように言っている男の目には、激しい憎悪の色が宿っている。

人質の女を見た。恐怖でひきつった顔になっている。もう限界にきているのは明らかだ。

鷹見は、男が自分から視線を外している隙に、そっと上着の下に装着しているホルスターに手を伸ばして、拳銃を抜き取った。

「呼べ！ 美奈子をここに呼んで——」

我に返ったように再び鷹見に顔を向けた男は、言葉を詰まらせた。

鷹見が拳銃を向けているのだ。

「!?——あんた、なにしてんだ?……」

男は、信じられないという顔をしている。

が、鷹見は平然とした顔で、

「ナイフを捨てて、その娘を放せ。言うとおりにしなければ、おまえを撃つ」

そう言うと、拳銃を持って右手に左手を添えて、撃鉄を起こした。

「おれを撃つって、あんた、この娘がどうなってもいいのか!」

男は狼狽し、拳銃に対抗するかのようにナイフを鷹見に向けて、声を上ずらせて叫んだ。鷹見の狙いどおりの展開だった。男はそもそも気が小さい。拳銃で撃つと言えば、きつとパニックになる。そう考えたのだ。

『班長、鷹見さん、やっぱり、どうかしてます! 止めてください!』

水原の悲鳴に近い甲高い声と、善場班長の呻き声にも似た吐息が鼓膜に響いたが、鷹見は顔色ひとつ変えないでいる。

「おまえが、その娘の胸を刺すのが早いか、おれの銃弾が、おまえの体を撃ち抜くのが早い
か、やってみようじゃないか——」

この至近距離なら、ナイフを持っている腕を撃ち抜くことはそう難しいことではない。し

かも、男は動揺し、人質からナイフを離している。人質が傷つく可能性も低い。撃つなら、今しかない。

鷹見が引き金にかけた指に力を入れた、まさにそのときだった。

「あっ——」

突然、男が小さな声を出した。人質の女が男を突き飛ばしたのだ。男はよろけ、その隙に女が離れた。

「ちくしょう！」

男が叫んだと同時に、鷹見は男に向かって助走をはじめていた。男の左手が、あとわずかで女に届こうとしている。

鷹見は二歩目でジャンプした。レジカウンターの上で宙に浮いた体を横にして、左手をカウンターについた。

男が鷹見を見た。鷹見は猛禽類のような非情な目で男を睨みつけている——次の瞬間、鷹見の揃えた両足が男の顔を直撃した。

男は吹っ飛び、背にしていた柵に体をぶつけた。その衝撃で手から離れたナイフが宙を舞った。男は背骨を抜かれたかのように、すくと床に腰から落ちた。

そばに着地した鷹見は拳銃をホルスターに収めると、腰に装着している手錠を素早く取り

出して、男の両手にかけて。

「確保！」

鷹見が鋭く低い声で叫んだ。

間もなく、捜査員たちがいっせいに店内に突入してきた。

床にねじ伏せられている男は茫然としている。

鷹見が人質になっていた女の店員へ視線を移すと、水原が女の店員の両肩を抱くようにして話しかけながら店の外へ連れ出そうとしていた。

鷹見が外に出ると、いつ降りだしたのか、粉雪が舞っていた。季節は、十二月半ばである。

「ご苦労だった」

店の前で待ち構えていた善場班長が、吐く息を白くして鷹見に言った。

だが、その顔には安堵も喜びもない。むしろ逆だ。

いっそミスをしてくれれば、責任を取らせてどこかの所轄署に飛ばすことができたのに――腹の中でそんなことを思っている顔に見える。

「あとは所轄に任せていいな？」

長身の鷹見に対して、善場班長は百六十センチ台と小柄で、鷹見を見上げるようにしている。

おまえひとりの手柄にはさせない——顔にそう書いてあった。

「どうぞ」

鷹見には、手柄などどうでもいいことなのだ。重要なことは犯人を逮捕する、その一点なのである。

一方で犯人確保は、狩りが終わった——そんな感覚でしかない。

「しかし、あの男、バカなことをしてかしてくれたもんだな」

善場班長が、逮捕された男を目で追いながら言った。男は捜査員たちによって、パトカーに押し込まれようとしていた。

その男を撮影しようとしてテレビ局のカメラマンが群がり、レポーターたちがなにやらまくしたてている。

「鷹見、おまえもそう思うだろ」

善場班長が、鷹見に視線を戻すと、鷹見は男を見ることなく、乗ってきた捜査車両に向かって歩き出していた。そんな鷹見を見て、善場班長は軽く舌打ちしながらあとにつづいた。

人質になっていた女の店員を男とは別のパトカーに乗せた水原が、善場班長と鷹見のもとへ向かってきた。

水原は身長が百六十五センチほどだ。いつも黒のパンツスーツにローヒールの靴を履いて